

しかし、馬の体内から、馬肝石が時々出ることがあったと見え、

伊予の松山藩主、松平隠岐守定国（白川楽翁松平定信の兄）の馬が病死した。不思議な死因なので腹を立割って見ると臓腑の中から一尺廻りも固った石が、二つ三つ出た：：という咄もあるし、寛政九年三月、幕府の医官、多紀安元法師の宅で物産会が開かれているが、その会に桂川甫周が、「馬石」を二つ程、持参した記録があり、その時甫周はその一つを試みに割って見た。すると鉄錢一文が中から出てくる。もう一つを試すと、この方からは釘の折れたものがあつた。まことに少しの障りから物が固まって遂に石魂となるものだ！とその時参会していた服部玄広という人から聞いた話が、「随得抄録」に見えている。

十一 鈴石

手に握って振ると鈴のように鳴るので鈴石というのだが、その珍らしい石が三

豊郡豊中町の比地中から出たことがある。

産地は比地の爺神山だ。標高は約百八十米ぐらい——、昔は詫間弾正の城のあった所といわれる。頂上には礎石のようなものもあつて、今では竜王（雨乞の神）の祠を祭っている。

眼下には詫間湾がひらけて眺望の美しい山である。山腹を廻る路があつて、四国八十八ヶ所に擬した霊所があるが、鈴石の出る所は山の南面で、四国道に沿った所に、流水で、浅く掘られた小さい谷のようなところから発見されたもので、今では、すっかり取り尽されて、容易に見つけることは出来ない。

この爺神山は地質学的に言えば、深成岩（地下の深い所で出来た岩）である、花崗閃緑岩（ミカゲに似て稍青黒い）や閃緑岩から出来ている。

その閃緑岩が風化し、核状になったものが土中から採集される。従つて鈴石は小魂のもので大きいものでもその経は二寸五分から三寸ぐらいのものである。

鈴石がゴロゴロと鳴るのは、内部に核があり、それが周囲から離れたためで、

風化閃緑岩の一部は、その岩中にある斜長石が炭酸カルシウム化し、それが沈殿凝固する場合、内外の凝固力の違いによって中心に亀裂を生じ、そのために内部が外部と離れたもので、鈴のように鳴るといふわけである。

この石は、大正十三年に天然記念物として調査報告されてから、爺神山の鈴石として名高くなつたものだ。

ゴロゴロ鳴る鈴石で思い出すのは、鳴石である。大川郡の大川町、古い地名では松尾村の田面―そこに鳴石という石がある。

しかしこれは文字通りの鳴る石ではなく、横が三間、縦は五間に余る程の平らかな大花崗岩の名前である。この大きい岩が田面の通谷という溪間に傾いて、そえに葛蔓がからみつき、紅葉の頃は溪間の風景を一きわひき立てている。いわばこの土地の名石である。しかし鳴石という名の由来はどうもわからない。

鳴石―について、また思い出されるのは、鳴る玉だ。この鳴る玉が三豊郡豊中町の高野から出たという文献がある。この玉はギウギウと鳴る。それでギウギウ

玉と呼んだことが、西讃府志の記事にある。

安永年中、東高野村の農夫、万治郎というものの宝珠寺の旧址あたりで玉を掘出す。その玉を掌に置けばギウギウと鳴る音がする。ギウギウ玉と呼んでその家に秘蔵していたが、高価に売れると思つて万治郎は京都へ持出したが、そのまま帰りもせず、音信も絶えてしまった。

と、書かれているが、西讃府志にある、この鳴玉は、はたしでどんなものであつたろうか。

十二 小判石

三豊郡豊浜町の箕浦の土産として昔はよく知られていたものに小判石というのがある。

西讃府志に、「箕浦の海浜に多し、青色にして銀光あり、形判金の如し、また